

滋賀大学体育会ラグビー部と私

50数年間を振り返る

三神憲一 / 滋賀大学 名誉教授

1 はじめに

月日の経つのがとても早く感じられる齢になってきました。今年（2023年）は滋賀大学の前身である彦根高商の開校から、また同時期（この頃のラグビー競技というのは極めてマイナースポーツで楕円形のボールを見たことのない生徒がほとんど）に初代陵水ラグークラブの会長となられた今村米蔵氏が部員獲得のため昼夜を問わず奔走され、やっとの思いで創部にこぎ着けたラグビー部も100周年という大きな節目を迎えることができました。まことにめでたいことであると同時にこの繁栄に寄与されていた諸先輩方に心より敬意を表します。先日大学の100周年記念特集関係の先生から関係クラブの指導者、代表者、OB会長等に「滋賀大学彦根キャンパスにおけるコーチングの実際」というテーマで執筆依頼がございました。私は経済学部に着任して退官までの43年と、その後非常勤講師として十数年合わせるとすでに50年以上という長い年月が経っていますので、記憶違いや定かでない点多々あるかと思いますが、寸断されている脳神経細胞をつなぎ合わせ（実際には不可能）るような気持ちで拙い記憶を辿っていきます。おそらく回顧録のようなものになるかと思いますがお許し下さい。

私が滋賀大学経済学部に着任した当時（昭和44年）の入学定員は240名。その中で課外活動（運動系・文化系）への加入率がなんと90%以上、なかには運動系・文化系両方のクラブに所属していた学生もかなりいました。そんな状況だったので、新入生に対する勧誘合戦は各クラブとも一人でも多くの学生を入部させたいという思いからとても荒っぽい方法で勧誘合戦を行っていました（詳細は『彦根論叢』第437号（2023年秋号：『彦根論叢』「経済学部100周年記念企画」第1段エッセイ「これまでの経済学部・これからの経済学部」）p.015参照）。ただ、近隣の国立大学でも新入生勧誘に関しては類似したような方法で行っていたので許容範囲内だったと思います。このような勧誘合戦の中、ラグビー部は試合を行う人数が15名必要なため必死で勧誘を行っていました。私が監督を務めていた間でも新入部員を入れなければ15人に満たない年も数回ありました。いろい

ろな苦難の時代を乗り越え、今日まで継承されてきた要因は様々なことが考えられますが、まず主たるものと考えられるのは、それぞれの年代における同期の固い絆と友情、そしてクラブへの愛着心と思いやり、また「滋賀大学ラグビー部のOBOG会である陵水ラグークラブ」（東京・大阪・名古屋）のご協力とご理解、そしてこれらを総括している陵水ラグークラブの強固な組織力だと考えています。中でも前会長の足立貞夫さん、副会長の木村雅彦さんと井俣敏明さん、そして新会長の松川泰弘さん。この執行部の存在を忘れてはなりません。就任されてから春の定期戦、夏の合宿への帯同、学生新幹部とのミーティング、秋の本シーズン等ほとんどの行事に参加されました。今回の陵水ラグークラブ創部100周年記念総会が盛大にそして成功裡に終えることができたのもこの執行部のおかげです。足立前会長は6度の大動脈関係の大手術を受け、体調がすぐれないにも拘らず、現在も陵水ラグークラブ創部100周年記念誌の発行に向けて全力を傾注されています。陵水ラグークラブ若手OBOGの皆様もこの事実を是非知っていてほしいと思います。心から感謝をしています。私自身、正直言って半世紀以上にわたり滋賀大ラグビー部並びに陵水ラグークラブの皆様と今日のような深い関わりを持つことになろうとは夢にも思ってもいませんでした。

私は中学校の頃から体育教師に憧れ、中学校では9人制バレー、高校ではラグビー部に、大学は当時早稲田、明治、慶応、法政などの強豪校に追いつき追い越せと、とても勢いのあった日本体育大学へ進みラグビー部に入部しました。この頃の夢は4年間歯を食いしばってラグビーをやり遂げ体育教師となり、郷里（愛媛県）に帰って自分の高校時代に果たせなかった県の決勝戦（インターハイの県予選）で、3年間全て敗れた新田高校をなんとか倒して生徒達をインターハイに出場させたいという思いでした。

しかし、この夢は残念ながら叶えることは出来ませんでした。別の形で体育教師になるという夢を実現させることはできました。それは昭和44年4月1日付で、滋賀大学経済学部の体育の助手として採用されたことです。彦根に赴く時に日本体育大学のラグビー部の恩師から「お前は150名以上の部員を側面的に支えるプレーイングマネージャーを体験してきた。そのことが必ず役に立つときが来る。滋賀大に行って

も慣れるまでは当然辛いこと苦しいこと他にもいろいろと迷うこともあろうかと思うがそんな時には1回生時の苦しい体験や夏合宿のランパスを思い出せ、あの苦しさに比べたら何でもできる、常に克己心を忘れずどんなことにも喰らいつけ」と先生らしいはなむけの言葉を胸に秘め来彦しました。

2 大学紛争と学園封鎖

私の大学教員生活43年間の中で特に印象に残っている衝撃的な出来事があったのが、赴任した昭和44年の年のことでした。ラグビー部とは関係ありませんが体験したその時の状況について少し触れてみます。それは数年前から全国的に大学紛争が頻繁に起こり、本学内でも5月頃になると民青系の学生と全共闘系の学生たちの小競り合いが多くなっていました。学内で民青系の学生たちが集会を開いていると、全共闘の学生が青竹を持ってその集会を潰しに来ます。また、その集会をいつも止めに入る教官は体育の山内隆先生と私、それに経営の門脇延行先生の3人、そして事務官1〜2名でした。当然青竹を振り回している中に入って行くので後ろからは何度も叩かれましたが、多くの場合民青系の学生がその場から去って終わるというパターンがほとんどでした。教育学部が6月に経済学部は9月中旬から11月後半までの2ヶ月以上の間、大学正門が封鎖されました。この間の授業はどうだったのかというと、彦根は井伊家が藩主を務めた彦根藩三十五万石の城下町だったのでとてもお寺が多く、その中の理解ある近隣のお寺(江国寺、松原寺、相国寺など)やカトリック教会(外堀沿いにある)を借りて教室代わりに授業が行われていました。各場所には2名の教官あるいは教官1名プラス事務官1名が“立ち番”として配置されました。その任務は、全共闘の学生が隊列を組んで「闘争ピッピー、勝利ピッピー」と笛を吹き鳴らしながら授業を潰しに来る前に、担当教官や聴講している学生に「すぐに逃げてください」と素早く連絡することでした。しかし数回は間に合わず襲撃されたお寺もありました。このことに関連して、松原寺の御住職である佐々木さんには私が赴任する前から滋賀大ラグビー部の練習指導だけでなく、部員たちの面倒をよく見ていただいていたのですが、その本堂が学生運動家たちの放水で水浸しになったり、消火液を撒き散らされました。いかなる理由があれ多くの仏様

が安置されている本堂を荒らす行為に対しては本当に「この罰当たりが」と激しい憤りを覚えました。お寺やほかの施設での授業に関してはほとんど授業にはならなかったと思います。

9月の学園封鎖を契機に従来までの教授会構成メンバーは講師以上という規約がありましたが緊急事態なので助手も急遽、「参加しなさい」という連絡が入りました。封鎖中なので学内では教授会ができません。最初はバスに乗せられ盆梅で有名な長浜の「慶雲館」、その後は彦根の市民会館、彦根の農協、銀座通り裏にあった芹橋の官舎などと実施場所を転々としながら教授会が行われました。この間でも教官有志と全共闘学生との話し合いが数回もたれその結果、11月後半2か月以上に及ぶ封鎖が解除されました。教授会も従来どおり2週間に1回、大学内の会議室に実施されるようになりました。滋賀大学の封鎖が終息したのは全国的にみて一足早かったと言われる理由として、「それは目標とする方向が政治問題や国際問題に移行すると一般学生がついてこなくなった」と小倉栄一郎学部長は回顧されています。当時の学舎は木造で廊下も板張りだったので教官も学生も下駄履きが多かったように思います。

封鎖の後、教授会の主たる審議事項は主に①全共闘学生たちの処分について②後期試験の実施方法③単位の出し方についてなどでした。これらの事項について審議するわけですが、かなり激しい議論が飛び交う中、白熱してくると罵詈雑言もしばしば見られました。議題に関しては投票や挙手をして採決をとるのですが毎回決定ということにはならず結局、次回教授会へ先送りとなっていくことが多かったと思います。さまざまな理由で学部長を断っていく教授が多い中、ある学部長は就任される時から「全共闘の学生たちを処分するつもりは毛頭なく、大学という教育の場で教えることを断念して、学生たちに一生涯残る疵をつけて追い出すことはできなかった」とその理由を陵水60年史で述べられています。①の議題についての処分はありませんでした。ただ閉口したのは教授会があまりにも長すぎることでした。14時から始まって終了するのが23時から24時と、今ではとても信じられないような長い時間を要しました。余談ですが西門を出たところに「大和」という食堂があり、そこから多くの先生が注文された品が18時頃に教授会の席に出てきます。麺類を頼まれた先生は

本当に悲劇でした。前述のように議論が激しさを増してくると誰も箸に手をつける教官はいません。19時には麺が伸びているしおまけに冷めてとても食べられるような状態ではありませんでした。「ここで食事休憩にします」と学部長が言っていたのであればいいのにと何度も思いました。

以上のように学園封鎖は解除されたものの、2ヶ月以上の空白は簡単には回復するものではありませんでした。一般学生も必要以外はあまり学内に寄り付かず、大学全体に沈滞ムードが漂っていました。このような状況を払拭するために尽力されたのが体育会を中心とする運動クラブの学生でした。当時の体育会が企画した行事の一つに「榎本杯争奪駅伝大会」がありました。1チーム6人の編成で1区間5～10キロの距離を襷でつないでいくのですが教職員チームや運動系・文化系の各クラブ、ゼミ代表、それに一般学生のチームなど60チーム以上が参加してとても盛会でした。他にも、新入生を歓迎し彦根城とその周りをよく知ってもらおうという意図で企画された「新入生歓迎マラソン大会」、体育会が直接プロ歌手の所属する事務所と入念な交渉を取りながら進めたフォークコンサート大会。そして、教育学部との協力という意味では毎年実施方法や会場等、次々と新企画で実行されていた「滋和二大学学長杯争奪戦」、更には昭和42年から継続されているリーダーストレーニング。これらの企画は今日でもよりよく改善を加えながら継承されています。このような体育会を中心とする活動のおかげで大学も徐々に活気を取り戻していきました。体育会の大学に対する役割というのはとても大きかったのではないのでしょうか。あの頃の学生は真摯な一面と一方では覇気があり反骨精神のある学生が多かったように思います。

3 当時の「体育」の概要と多忙な社会活動

あの頃の大学における「体育」の取扱いはそれぞれの大学、あるいは学部によっても違っていました。また、大学全体としての一般教養科目の人事やその配置、担当方法に関してもいろいろ問題点を残したまま実施されていたように思います。経済学部では1、2回生必修。併設の滋賀大学経済短期大学部も1回生必修というものでした。当時の体育施設や教官数の関係で私は週10～12コマ、それに短大2コマと信じられないようなコマ数を持っていました。それに加

えて夏季休暇を利用して実施されたのが、まず地域の自然環境を有効に利用した琵琶湖でのヨット実習。少し後からは本学部の卒業生の就職先などを配慮し、OBのご協力(ゴルフ場関係)を得て実施したのがゴルフ実習です。そしてプールで泳げるだけでなく、波のある海でも泳げるように、また救急処置やキャンプの知識などを取り入れた「海浜実習」。いろいろな実習の中で、今日も継続して実施されているのがゴルフ実習です。これらの実習はほとんど休みなく約2週間と少し実施しました。後期は通常の授業を受講するか、集中講義(スキー)を受講するかの選択でした。あの時代の社会現象の一つとなっていたスキーブームの影響でしょうか、ほとんどの学生がスキーを選択していました。これも冬季の休暇を利用して実施されましたが、その内容は1班3泊4日で12月に1つの班、1月に2つの班と経済短期大学部1班、2月と3月で3班、100名(短大は50名)編成の7班で実施するというものでした。

スキー実習の期間中はおよそ1ヶ月以上冬山に居たことになります。当時の学部長だった小倉栄一郎先生は続けて4～5年、そして多くの若手教官も積極的に参加されていました。私も最初3～4年間はいろんな意味で勉強させてもらいました。辛い時には早朝、民宿の近くにあった火見櫓の近くから眺める真っ白な北アルプスを見ていると苦しいこと、辛いことなど一瞬のうちに忘れ去ることもできました。またあの写真のような美しく素晴らしい風景は今でも脳裏に焼きついています。これらの実習内容は学生たちに湖、海、冬山といった自然を対象にその厳しさ、美しさ、驚異などを身をもって体験できる場を提供できたと思っています。一方指導する側においてもどちらかという技術系の内容が多く私も初めは滋賀大学体育教官、地元スキー指導員の指導法を模範としそれを何度も繰り返しながら形を習得し、さらに吟味検討しながら積み重ねその過程の中で技術的な向上(スキーは3年目に1級の白い雪の結晶のようなバッジをいただいた)と共に指導方法においても少しずつ引き出しが多くなっていったように思います。ただ昭和44年以前からもそうだったようですが、スキー実習の用具(スキー板、金具、ストック等)に関してはすべて正課体育の大学備品扱いだったので、各班ともその用具修理に費やす時間が半端ではありませんでした。今ではとても懐かしい思い出となっています。

大学の課外活動に関してはラグビー部の指導と助言(詳細は後で述べますが)が主たるものでしたが、それ以上に多忙だったのが学外での社会活動でした。着任した昭和44年に滋賀県ラグビーフットボール協会の理事長から「あと12年経つと滋賀県に国民体育大会が回ってきます。残念ながら滋賀県には現在B級レフリーの資格者が一人もいません。B級レフリーの資格を取得すると国民体育大会のラグビー競技や全国高校ラグビーフットボール大会(インターハイ)の笛を吹くことができるので申し訳ないが(規定では年齢が25歳以上でなければ受験資格がないのですが)事情は関西ラグビーフットボール協会にも通しているから高知まで行ってB級レフリーの試験を受けてください」と頼まれ夏季休暇を利用して高知に行きました。B級レフリーの資格は取れたものの、その後県内の社会人・高校の決勝はほとんどレフリーとして笛を吹かざるを得ない状況でした。その頃のルールの中でもアマチュアリズム(外来文化に対する日本的解釈の相違があまりにもひどかった)に関してもとても厳しく、依頼された会場まではほとんど手弁当、全て自費といったものでした。県のラグビー協会の理事、コーチーズソサエティと選手強化の委員長、関西ラグビーフットボール協会役員、関西大学ラグビーリーグ理事、日本ラグビー学会理事、そして昭和56年(1981年)に滋賀県で開催された国民体育大会では滋賀選抜(高校)チームのヘッド・コーチとして指揮をとり、ラグビーフットボール競技の総合優勝に貢献しました。あの当時を振り返ると自分はいつでもどこでも休みらしい休みを取っていたのかその記憶がほとんどありません。おそらく若かったので体力があり「何でも貪欲に覚えてやろう」という積極的な姿勢のほうが休むことよりも優先していたのだらうと思います。

4 滋賀大学ラグビー部との関わり

私が経済学部でラグビー部員と初めて出会ったのは着任間もない昭和44年4月の後半だったと思います。当時のグラウンドを使用していた運動部は陸上部・野球部・ラグビー部・ハンドボール部、そしてテニス部は現在の生協の建物のところにテニスコートがありました。各クラブはお互いに課外の練習時間をうまく調整し合いながら使用していました。グラウンドにはクローバーや相撲取草が生えていました。

そんな中をラグビー部員達と彦根城の西の丸の白と黒のコントラストの美しい景色を見上げながら一緒に走りました。ただ私は経済学部の体育の教官(助手)として採用されましたので本業はあくまでも授業(教育)と研究ということになります。体育教官の榎本先生は主に剣道部と陸上部を、山内先生はご自身がご専門の器械体操部がなかったので運動クラブ全体を見られていました。両先生に運動クラブとの関わりについて伺いましたがお二人とも「自分の思うようにやりなさい」という考え方でした。ラグビー部員は当時から初心者が多かったのですが一つの技術を習得するのに何度も反復していたのを思い出します。ただこのような直向きさと試合に勝ちたいという思いが徐々に伝わってきました。しかし心理的にはどこまでクラブに関与していいのかそのウエイトの置き方について中途半端な精神状態が数年続きました。そしてあれは滋賀大学着任5~6年後に京都で行われた京都工芸繊維大学との練習試合の後、滋賀大ラグビー部の創始者であり初代陵水ラグークラブ会長の今村様(体調があまりすぐれない状況でした)とその今村様を介護されながら来られていた山崎様(第3代陵水ラグークラブ会長)から「三神先生毎日ご多忙なこととは思いますが経済学部の部員たちは初心者が多く指導も大変だと思います。しかし基礎技術を貪欲に習得してやろうとくらくいついてきます。勝つための準備は当然しなければなりません。勝ち負け以上に敬虔なラグーマンを育ててやってください。」と本当にご丁寧にお2人からご依頼を受けました。このお2人の滋賀大ラグビー部並びに陵水ラグークラブに対する功労は計り知れないほど甚大なものがあります。ラグビー部を愛し母校を愛しOB組織の充実・発展のために人生を傾注されたと言っても過言ではありません。あの言葉を聞いて私は「滋賀大経済学部ラグビー部の監督をやらなければ」という思いが次第に強くなっていきました。その後30年近く監督をやり、退官してからも10年以上総監督として見てきましたがほとんどの年は反省ばかりでした。そして託された「敬虔なラグーマンの育成」に関しても自問自答するのですが「こういうことを託されたのでは」という明確な解答は今も出てきません。おそらく一生考え続けていくと思います。それだけ深く重みがあり難しいことだと思っています。このような繰り返しの途中で振り返ってみるとなんとすでに50

数年という歳月が経っていますが、自分の中では「もうそんなに経ったのか」というのが実感です。しかし少しばかり安堵できることは、初心者で入部した学生が日々の練習、夏合宿と体力、技術、メンタル面を部員と共にトレーニングし、シーズンの試合に臨み、色々な場の体験を積み重ねながら4年間ラグビー部をやり遂げ、本当にたくましくなっていき、彼らを卒業生として送り出す時「自分の生き様に何の悔いもない」と思えることです。自惚れになりますが、このような教育的過程の中に「敬虔なラグーマン」育成のヒントがあるのかもしれない。

話は少し戻りますが、赴任した当時は学園紛争・封鎖などの影響でしょうか部員の中には思想的に右寄りの者、あるいは左寄りの者、そして我関せずと我が道をゆく者がいてチームをまとめる主将、副将、主務の三役は大変な状態だったと推察します。私はそれでも「何とか強くして勝つ喜びを味あわせてやりたい」という強い思いがありました。そこで考えたのが同じ大学生でもトップレベルのプレイヤーと一緒に体験するなかで各部員たちの弱点をいろんな角度から指摘してもらうことにより少しでも技術的な向上がみられる。あるいはチーム全体の強化にもつながっていくのではと思い、合同合宿を計画しました。私が着任した年(昭和44年)の夏、日本体育大学ラグビー部員の東海・関西・四国方面に帰省する者に「おーい、少し力を貸してくれ」と声をかけ経済学部ラグビー部員と彦根市内のお寺を宿舎にして合同合宿を試みました。力を貸してくれた日本体育大学ラグビー部11名のメンバーの中には翌年(昭和45年)の全日本大学ラグビー選手権大会決勝で大接戦の末、早稲田大学を破り学生日本一、その勢いをそのまま持続して全日本ラグビー選手権大会でも富士鉄釜石を破り見事日本一に輝くことになるレギュラーメンバー5名も参加してくれていました。

この5名の中にはのちに関東学院大学ラグビー部の監督となり、ある一時期各年ごとに早稲田大学と学生日本一を争った知将春口廣君、リコーで活躍し、のちに日体大ラグビー部のFWコーチを務めた広田実君。愛媛の新田高校で監督を務め、数多くの全日本選手を育てることとなる福沢敏夫君、昭和47年の日体大ラグビー部のキャプテンとして活躍した中村博君、プロップで活躍した佐藤秀記君、ほかの6人も準レギュラー級の選手たちでした(ちなみに、あの当

時日体大のラグビー部員は150名ほどいました)。

夏合宿3日間の練習メニューは1日3部練習としました。早朝は彦根城の天守閣前の広場までジョギングをして登る。途中100m近い緩やかな坂道で往復ダッシュを何回もさせました。瞬発力と持久力を養うことが狙いでした。大学のグラウンドに戻り、午前中は徹底的にラグビーの基本技術である、ランニングパス、パスのスピード、キャッチング、キックとタックルなどを全員に課しました。その後、FW・BKに分かれ練習、FWはスクラムの組み方、押し方、ラインアウトの攻防、BKは、当時流行していたスピードマーチャント(素早いパスでの外側展開)戦法の確認とラインの深・浅、各ポジションの間隔(長・短)を訂正させました。そして日本体育大学の部員から未熟な部分や問題点を指摘してもらいました。午後は日本体育大学の部員11対15のAD(アタック・ディフェンス)を中心に課題点を反復させました。また、PKをもらった時の素早い反応と周囲にいる選手のフォローアップ。これも反復させたいと思います。全体的にはボールをもらう時の姿勢とスピード、ボールキャリアを頂点として可能な限りトライアングル(三角形)を壊さず、いつも内側でも外側でもボールを貰える状況を創っていく。そのためにはパスアウト後のスピードとフォローアップの重要性を確認させ、かなり踏み込んだ練習をさせたと思いますが、私の思いとは・・・。

部員たちに日本体育大学の選手から個人的にも丁寧な指導を依頼しましたが、現実にはあまりにも体力面の差が違いすぎました。私は「この位はできるだろう」という思いが先行し、滋賀大ラグビー部員の体力、メンタル面の実状をもっと把握しておくべきだったと反省しています。あくまでも推察ではありますが一つでも多く勝たせたい、そして15名全員で勝った時のあの喜びの感情を味わってほしいという思いで計画した合同合宿も「日本のトップレベルのラグビー部員と一緒に合宿をして貴重な体験をさせてもらった」と思う部員よりも「あまりにも体力、技術面の差が大きく、疲労困憊となり、思考回路も寸断され、いろいろ指導してもらったがそれらを理解することができなかった」と感じた部員の方が多かったのではないだろうかと思います。陵水ラガー創部70年史(30年前に陵水ラガークラブが刊行した周年誌)にも少し触れていましたが、この年に行われた近畿地区国立大学体育大会において、滋賀大ラグビー部(関西大

学ラグビーリーグCリーグ)は準決勝でBリーグの大
阪教育大学を破り、決勝ではBリーグ1位だった神戸
大学に敗れはしたものの大健闘の準優勝でした。そ
の後、試合時間の70分間を維持できる走り負けな
い持久力と、短い距離を瞬発的にスピードの出せる
走法やランニングパスを中心にかなり走り込ませた
と思います。そして、大学23回(1975年卒)木村雅
彦、亘伸夫(旧姓柏木・故人)、奥原和之(故人)の三
役で挑んだ本シーズン(滋賀大学ラグビー部はC1ブ
ロックに所属し、チーム数は8、他にC2、C3、C4の
それぞれ8チーム×3ブロック、合計32チームでCリー
グを編成)において、C1リーグで初優勝、そしてあの
頃はBリーグとの入れ替え戦に出場できるチームは1
チームでしたので、C4の優勝チーム・神戸商科大学
(現兵庫県立大学)をまず破り、Cリーグの決勝は花
園ラグビー場で大阪大学との対戦となり、前半自陣
22m付近でなんと続けざまに3回相手にPKを与えて
しまいました。その後、キャプテン木村の正確なキッ
クと全員でBリーグに昇格しようという強い思いで最
後まで気を抜くことなく戦いました。後半トライ数は
滋賀大の方が勝りゲーム内容も流れも滋賀大に傾
いていましたが、なんといっても最初にPKを3回とら
れたことが残念でたまりませんでした。選手並びに出
場できなかった部員も本当によくやったと思いました。
心の中では称賛していたもののゲーム後の私のコメ
ントは、「惜しかったらもっと、もっと練習し、その練
習の場で泣いて、ゲームで笑え」と部員たちになお一
層の努力を求めたものでした。

大学27回卒の名キャプテンだった岩崎博之く
んの時に大学内のグラウンドから八坂町にある現在
の滋賀県立大のグラウンドへ移転しました。大学から
八坂グラウンドまでの距離は6〜7キロ、自転車
で片道約20分の道のりです。しかもグラウンドの状態
というのが月曜日に雨が降ると木曜日まで乾かない
という劣悪なものでした。さらに八坂病(皮膚病の
一種で、患部がただれてくる)にも悩まされました。本
シーズンの秋から冬にかけては釣瓶落としのように
すぐに暗くなります。しかし、照明設備というものも全
くなく暗くなると車のライトを数台つけて照明代わり
にもしました。このような悪条件にもかかわらず、第
28回(1980年)、加藤嘉朗(故人)・村尾慎哉・奥田
勝則君の代で因縁の相手(大教大)を破り、2回目の
近国体優勝。その後はC1ブロックで滋賀大、龍谷大、

京教大の3校がしのぎを削り、数年にわたり上位争
いを展開しました。そして大学32回(1984年)入江直
樹・河辺昭宏・酒井康就君の異色のトリオ?で臨ん
だリーグ戦でC1ブロックで優勝、Cリーグ全体の決
勝戦でも大阪大学を破り、Cリーグ完全優勝。そし
て万博球場でのBリーグ昇格の入れ替え戦では3度、
宿敵大教大と対戦、前半1点リードで折り返すも私
の采配ミスで惜敗。力のあったチームだけにとても
残念でした。その後、大学35回(1987年)森崎昭二・
北沢秀司・後藤大作君の三役でスタートしたシーズ
ンで近国体3度目の優勝を果たしました。平成3年
施行の大学設置基準の大綱化を受け経済学部も全
学的な改組が行われました。加えて、大学改革・学
部再編成等の影響もあり、八坂グラウンドから平成
7年に現在のグラウンド(昔の白洋物産の後)に移転、
大学が要求していた等面積での交換は叶わず、等価
交換となり総面積がかなり狭くなってしまいました。

新しくなったグラウンドの開場式に参列して驚い
たのは400mトラックの中のフィールドには真っ白な
小石が敷き詰めてありました。早速、当時の吉田修
経済学部長に「滋賀大の施設は何を考えているの
か」と、あまりにもひどい状態に呆れてしまいました。
吉田学部長の一声で小石を撤去し、土のグラウンド
にさせていただいたことを思い出します。土のグラウン
ドでは、正課のスポーツ科学の授業、課外活動では
陸上、ラグビー、サッカー、アメフト部が同じ条件で
使用していました。しかしこの新グラウンドは、琵琶
湖からの北西風が吹くと砂埃で目の開けられない時
がしばしばありました。また夏場になるとラグビー部
とアメリカンフットボール部女子マネージャーが練
習前に細いホース(50m)で30〜40分かけて散水す
るのですが、5分も経たないうちに乾いてしまうとい
う悲惨な状況でした。土のグラウンドは前述の状態
だけでなく、怪我、擦り傷、切り傷が多く八坂病に似
た皮膚病が流行り、部員たちは大変でした。あると
き、ラグビー部の女子マネージャーとアメリカンフッ
トボールのとてもしっかりした女子マネージャーから、
「この土のグラウンドを何とかしてください」と強い
要望があり、この実情を学生支援課長の西川さん、
経済学部事務長の二宮さん、その他本部の関係事
務局長に相談し、「なんとか天然芝にならないか」と
直談判しました。そして私が鳥取大学に行き「NPO
グリーンスポーツ鳥取」の関係者に会い、グラウン

ドを天然芝化するための必要事項を十分聞き取ってきました。その後一足早くグラウンドを天然芝化している京都大学のグラウンドに西川さん・二宮さんに帯同していただき、京都大学ラグビー部のOB会長から様々な問題点を指摘していただきました。その結果、滋賀大学の方も年々減らされている国からの運営費交付金の中から基盤整備（グラウンドを掘り返して散水栓を設置）に関しては補正予算でやっていただいたものの、地方国立大学の悲しさか他の維持管理を継続的に行っていくための予算は保証できないという話でした。そこでフィールドを使用している三つのクラブ（ラグビー・サッカー、アメフト）と大学関係者で数回会議を持ちましたが、維持管理を続けてやっていくための基金についての合意は得られませんでした。私はここまで来て断念することはグラウンドを使用する学生たちのことを考えるととてもできませんでした。そこで何か方法はないかと私案したのがグラウンドの芝化に関する諸事情（メリット・デメリットも含めて）について陵水ラグークラブに相談しました。結果は快く賛同していただき、「芝生化維持管理金」として私の退職金の一部と陵水ラグークラブ有志で1000万円以上集めることができました。本当にありがとうございました。

平成25年9月15日待望の天然芝のグラウンドが完成、佐和学長はじめ、梅澤学部長、グリーンスポーツ鳥取の中野先生、体育の宮本・道上両先生、陵水ラグークラブの会長川口さん、副会長足立さん、大学関係者その他多くの学生が出席し、盛大な式典を執り行うことができました。

しかし、この基金も既に十数年が経っています。そしていつかは枯渇して行くのは目に見えています。芝生化により危害防止の観点から、さらには学生たちができるだけ心身ともに健全な状態でそれぞれのスポーツを楽しんでいくためにも、基金の目標額は問いませんがラグビー部以外のフィールド使用クラブのOBの皆様のご理解とご協力ご支援を心より願います。

5 教育者・指導者としての願望

赴任して以降、滋賀大ラグビー部を助言・指導して行く中で第一に考えておかなければならないのは、入部してくる学生のおほとんどがラグビー競技の初心者であるということです。大学生なので自分の専攻し

た学部学科の基礎と応用だけでなく、一般教養に関しても幅広くその知識を習得しなければなりません。他方本学の開学以来の継続的な特徴でもある課外活動への加入率の高さ（90%以上）があります。その課外活動の運動クラブの一つであるラグビー部。このクラブは歴史と伝統があり、OB・OGとの連絡も極めてスムーズに行われています。初心者で入部した学生にこの競技独特と考えられるラグビー競技のルール、その背後にある“ノーサイドの精神”や“ラグビー憲章”について、徐々に理解させていくことがまず問われます。そこから仲間と協力して競技の特性である間欠能力（80分間継続していける持久力と瞬発的にスピードを出していく）の向上、試合に必要な基礎専門的な体力づくりトレーニングを週何回やるようにするのか？ゲームに必要となる基礎技術（各種の走法、パス、キック、タックル、キャッチング等）を何度も反復して徐々に習得させていかなければなりません。さらに、ビデオを見ることやミーティングを重ねていく。可能であれば、春のシーズン（定期戦が主体）の中でFW・BKのコンビネーションを反復しながらそのチームに合った戦術・戦法を創っていくようにしていければと思います。それと並行して精神面の指導を段階的に強化して行くことも望まれます。その理由としてはあらゆる面の体力・技術の習得過程には大脳皮質・間脳と大脳辺縁系などの精神面というものが大きく支配・コントロールしているといわれているからです（猪飼道夫著（1973）『猪飼道夫随筆集』ベースボールマガジン社pp107～109、pp140～141）。また、大脳皮質に関連のある“意欲”や間脳・大脳辺縁系に根拠をもつ“根性”について、元日本代表ラグビー監督の平尾誠二氏（故人）は「今の若い人の特徴は、『反発係数』が低下していること、『連鎖反応』が薄れていること。すなわち、クソーと食ってかかる気合いや皆と一緒に感動することは稀である」と。シンガポール日本人会ラグビー同好会講演会の席で指摘されています。加えてコーチングの中では豊かな「包容力（キャパシティ）」と叱る・怒るだけでなく、それ以上にいい所を褒めてやるという元気付ける能力も大切だと述べています（シンガポール日本人会ラグビー同好会10周年記念講演会「スポーツからみた日本型マネジメントの限界～新しいヒトづくり、新しい組織づくり～」2005年3月）。

初心者の技術指導には、身近なところから徐々に

競争心を育ててやり一つの技術においても、“なにくそ”という気概を常に持たせながら自信をつけさせていく方法を気ながに継続させてやることも大切であると思います。しかし、入部してくる初心者は年度によって数が大きく変動し、絶対数が少ないためどうしても中途半端な状態で試合に出さなければならないということが現実です。ここが指導者・教育者としても葛藤するところです。

私は大学での課外活動（ラグビー部）というのは将来実社会に出て、より強く生き抜いていくための“準備期間”だと思っています。人はひとりになると易い方向へと流されやすい。そのためには、前述のように“なにくそ絶対に負けないぞ”という意欲の強さが求められます。確かに初心者がラグビー部を4年間継続して行く事の難しさ、色々な葛藤、辛さ、苦しさなどが必ず生じてきます。これらのことを同じ釜の飯を食うこととなる同期、あるいは先輩と協力し合い、乗り越え、“4年間続けて本当に良かった”と入部した頃の自分とは全く違った別の景色を感じられる部員、そしてOB・OGとなり、一緒に頑張ったあの頃の自分に会いに同期と一緒に彦根に来てほしいと思います。ラグビー部を4年間継続して行く事の難しさやいろんな場の体験を乗り越えた者は“どんなことにも負けないぞ”と精神的な糧も培っていくものと信じています。数本打ち込まれた心の支柱はなかなか折れない。そして、このような感情は部員達と語り、時にはしっかりと褒めたりするなかで、ラグビー競技独特の精神やマナーを身に付けていくものだと思います。中でもノーサイドの精神はラグビー独自のものかもしれませんがこのような精神的な特性は、彼らが卒業し、時代や社会が移り変わっていく中でもおそらく普遍的なものであり、陵水ラグークラブの一員になるためにも絶対的な条件たるものと常々思っています。近年は部員一人ひとりとの対話というものがきわめて大切だとも思っています。

私は今でも初代と3代の陵水ラグークラブ会長から託された遺言のような“敬虔なラグーマンを育ててください”という、とても重く、深いお言葉の中に、大学でラグビーをやる価値があるような気がしてなりません。これからも、おそらく杖をついてでもグラウンドに顔を出すと思います。

滋賀大ラグビー部の監督・総監督を長くやっていると苦い経験もたくさんありました。その中の一つと

して思い出すのは、あれはもう35年くらい前になると思います。福井大学との定期戦で福井大学のグラウンドへ行った時のことです。前半大差で勝っていて、後半もあと10分くらいだったと思います。次期主将候補の一人だったNo.8の清水義久君が、敵陣22m付近のマイボールスクラムからボールを持ち出し突進、密集状態（ラック）となり、その時に相手の膝が清水君の頸部を横から強打したような状態になりました。レフリーは唯一の事実の判定者であり、時間の決定者でもあります。周知のようにラグビー競技はとても激しいスポーツです。当然、そこには軽度の傷害や不慮の障害も起こります。だからこそ、レフリーは救急的な知識は勿論、その対応策においても習得していることが望まれます。前述のことに戻りますが、その時笛を吹いたレフリーはゲームを止めるために笛を吹いたものの、次の指示が全くできません。滋賀大のスクラムハーフだった河辺君が私たちのベンチの方に向かって、「清水が息遣いが荒く、とても苦しそうです」と叫びました。レフリーは何も指示ができませんで、ただ呆然と見ていただけでした。その状態に腹を立てながらも、私がグラウンドに入り「頭部は動かすな」と怒鳴りながら清水君に「手を握ったり離したりしてみろ」と言いましたがそれができませんでした。すぐに福井大の部員に担架の有無を確認したが無く、戸板のようなものを使用してグラウンドの外に出して直ちに救急車を手配しました。このような重傷者が出ているのにレフリーは何をしているのか、ゲームをどうするのか？という判断すらできませんでした。後の事はコーチ（山田康博君）に指示し、私は救急車の後ろから車にマネージャーを乗せ、福井県立医大へと直行しました。病院では、直ぐにレントゲンを撮り、状況を説明していただいた。結果は、首の4番目の頸椎が完全に真横に脱臼し、肩から下の神経が遮断され、全く動かない状態というものでした。脳神経外科医の先生は「この病院ではすぐに手術ができない」という返答。その時、瞬間的に閃いたのがあるOBの顔でした。それは当時、サントリーに勤務していた大阪の加藤嘉朗（今は残念ながら故人となっている）でした。そして彼の一番上のお姉さんのお主人（太田富雄先生）が、当時くも膜下の手術では日本でも著名な医師だったことを思い出しました。すぐに彼と連絡を取りました。加藤君からは「今、義兄（太田富雄先生）が、金沢大の医学部の先生と連

絡を取ってもらっています。もう少し待ってください」少し待つと再び加藤君から「義兄(太田先生)から至急金沢大の医学部の教え子?の先生に連絡され、今、金沢から2人の先生が福井へ車で向かっています」との返事、そしてその日のうちに金沢から来られた2人の先生に手術をしてもらうことになりました。一方マネージャーの和田友純君には、清水君のご両親に連絡を取ってもらった。しばらくして大阪からご両親が来られました。お母さんは本人の症状を聞くと、私に「息子を元どおりの姿にして返してください」と号泣されました。だが、お父さんは「自分の意思で選んだラグビーのゲームの中における不慮の事故なので、先生には全く責任はない。むしろラグビー部のOBの方に連絡を取っていただき、今日のうちに手術をしていただけるようにしていただいたのだから・・・」とは言えご両親の気持ちを思うと、私はいてもたってもいられない心境でした。

手術をしていただいた先生から「今日が生死の峠です」という知らせに、私とマネージャーの和田君が病院近くに2日間宿を取りました。手術は成功し、一命はとりとめたものの、その時は首から下が全く動かない状態でしたが言語はしっかりしていました。3ヶ月後転院し、地元の大阪の病院で懸命な辛い苦しいリハビリを実施。そしてなんと右腕の指先に義手をはめ、パソコンが使えるまでに回復しました。ただ、彼には健常者には分からないつらく厳しい日々が残っています。彼に対しては「私の目の黒いうちは必ず毎年見舞いに行く。同期も必ず手を差し伸べる。だから挫けるな、前を向こう」と励ますこと以外は何も言えなかった。

一方私の気持ちの中でどうしても許せなかったのは、福井大学のラグビー部と笛を吹いたレフリーのその後の対応です。3ヶ月間、地元(福井)の病院に入院しているにも拘らず、誰一人見舞いにも来ませんでした。また、レフリーも「その後の状態はいかがですか?」という問い合わせの一言もありませんでした。これがラグーマンかと当時は激しい憤りを感じたものでした。翌年から「こんなチームと定期戦をやる必要も価値もない」と定期戦を中止しました。他方その後40年近くクラブのOB担当を連れて清水君宅へ見舞いに行くのですが、毎年「何か困っていることがあれば何でも言ってください」とご両親(残念ながらお2人とも今は故人)に尋ねるとお母さんは「今

をしっかり頑張っているの、気持ちだけ頂きます」と言われる。清水君本人には「自分に負けるな」と言うのが精一杯である。本人は会社から委託された仕事を自分の出来る範囲内で頑張っている。彼のことに関連してですが、彼の同期と一緒に練習やゲームをやった有志が30年近く、これも自分たちの出来る可能な範囲内で経済的な支援を継続してくれました。また、滋賀大学の経済学部でも教官・事務官の有志が奉加帳を作って協力していただきました。医師や病院のお世話、経済的な側面など、本当に陵水ラグーの組織力の強さとその団結力のすごさに驚くとともに、心から感謝の気持ちでいっぱいでした。清水君の件に関しては今は故人となっている加藤(嘉)くんには本当にお世話になりました。彼の長男が令和3年の11月に結婚。そこに出席しました。その時、天国から涙を流して喜んでいる彼の姿が目に見え、本当に目頭が熱くなりました。

6 終わりに

50数年にわたる滋賀大ラグビー部および陵水ラグークラブとの関わりについては、本当にいろんなことがありましたが、前述のごとくそれぞれの年代において反省、否、猛省すべきことの方が多かったように思います。しかし、このような中でもどうしても押し通すべきだという信念のような思いもありました。それは初心者が多いチームなので、基礎技術と頸部の周りの筋群を鍛えるトレーニングだけはどんな事があっても継続して欲しいと願っています。そして前述したことと何度も重なりますが、初心者がラグビー部に入部し仲間と協力し合いながら、体力、技術、メンタル面のトレーニングを行ない、練習や夏合宿、そして試合をはじめいろいろな場の体験を積み重ねながら、4年間ラグビーをやり遂げて卒業式には見送るほど遅くなった彼らの顔を見るときは僅かではあるが、「自分の生き様に何の悔いもない」と、そんな思いにさせてくれる。本当にありがたいことである。また、技術面も大切であるがどちらかというと私は常に“己に克て”と精神面を強くすることを言い続けてきたと思っています。更に陵水ラグークラブと私の関係では、人として、あるいは教育・指導者として右も左も分からない本当に未熟だった頃から歴代のOB会長をはじめ、各年代の執行部・各支部長、加えて賢明なOB・OGの皆様ののおかげで今日まで何とか生きて

こられたものと感謝の気持ちでいっぱいです。

そして忘れてはならないのが20数年間私の右腕としてクラブの監督を務めてくれた山田康博君、春日井から週2回、試合会場に入れると3回駆けつけ、熱い指導をしてくれました。そして奥様にもクラブに対して物心両面から「縁の下の力持ち」的存在となっていただきご尽力していただきました深謝しています。

令和3(2021)年から山田監督の後を受け新監督になった入江直樹君。滋賀大学の経済学部特任准教授として着任し、部員たちの就職に関して色々面倒を見てくれています。これからのクラブ運営について彼の手腕に期待しています。大学内では経済学部長の要職に就かれ、ご多忙の中でもラグビー部員がゼミでも大変お世話になっており、もう十数年ラグビー部の部長をやっていた中野桂先生には心より深く感謝をしています。

滋賀大ラグビー部もOB・OG大学関係者その他いろいろな人々のご支援、ご協力のおかげで100周年を迎えることができました。このクラブが急激な時代や社会の変化があろうとも継承されてきた良き伝統を少しずつ変革させながら10年、20年と継承して行ってくれることを祈念しています。